

# 早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討

Assessment of education program and experience of 1-year nursing students in early clinical exposure

伊藤 朗子<sup>1</sup>、中岡 亜希子<sup>1</sup>、岡崎 寿美子<sup>1</sup>、岩永 真由美<sup>2</sup>

## 【要約】

本研究の目的は、A大学看護学部で1年次を実施している早期体験実習の評価と学生の学びの内容を明らかにすることである。方法として、学生の学習意欲、実習への自己評価を量的に分析する質問紙調査と半構成的面接法により個々の学生の学びを質的記述的に分析する面接調査を実施した。その結果、質問紙調査では、33名（回収率34%）から回答があり、面接調査は協力の得られた6名に実施した。学生の学習意欲は、実習や演習に前向きに取り組む項目が高い一方で、「夢の実現」や「憧れ」に関する項目が高く、将来の目標達成のための項目や情報収集に関する項目が低かったため、漠然とした関心や意欲を持っているが、現実的な行動には結び付いていない可能性が推測された。学習態度については、課題のレポートに取り組むという項目は高かったが、自ら看護を取り巻く幅広い分野も含めた情報収集を積極的に行う項目は低い傾向がみられた。早期体験実習からの学びは、実習目的、目標1-1)、1-2)、3で75%の学生が49.00～50.00以上の評価をしているが、下位25%の学生での実習目的の達成度では20.00以下の学生もみられた。学習意欲と実習への自己評価の間に関連はみられなかった。学生の学びの具体的な内容は、【患者や家族との関わりからの学び】、【医療や福祉の場を知ること】、【実習と授業とのつながり】、【看護ケアの具体化】、【意欲の向上】の5カテゴリが、早期体験実習への戸惑いと要望として、【初めての实習での戸惑い】、【早期体験実習への要望】の2カテゴリが得られた。

キーワード：早期体験 Early Exposure, 看護学生 Nursing Students  
学習意欲 Learning and Motivation

## 1. はじめに

近年、科学技術の著しい進歩による医療の高度化やそれに伴う倫理的課題が複雑に絡み合い、看護業務は多様化し複雑化している。そのため、看護職にはより確かな専門知識・技術とともに、深い人間理解を基盤にした実務家の育成が求められている。しかし、基礎教育において習得できる技術と臨床現場で求められる技術との乖離（赤松ら、2008；寺山ら、2008）が指摘されており、安全で適切な医療の提供への影響が懸念されている。また、看護学生の基本的な生活能力や常識が変化している（大橋ら、2008）と同時に、様々な年齢や社会背景を持った人々に対するコミュニケーションが困難である傾向（長家、2003）も指摘されている。これらの問題に対応するために、看護師・保健師・助産師のカリキュラム改正に向けて「看護基礎教育の充実にに関する検討会」が開かれ、平成19年4

---

1 Akiko ITO 千里金蘭大学看護学部看護学科（受理日：2009年10月1日）

1 Akiko NAKAOKA 千里金蘭大学看護学部看護学科

1 Sumiko OKAZAKI 千里金蘭大学看護学部看護学科

2 Mayumi IWANAGA 元千里金蘭大学看護学部看護学科

月16日付で報告書が公表された（厚生労働省医政局看護課，2007）。この中で、看護師教育の基本的な考え方は、看護の対象者を疾患や障害を有している生活者として幅広く捉えていくこと、他職種と連携・協働しチーム医療の中で看護の役割を果たしていくことなどが強調されている。また、基礎看護学における看護技術にコミュニケーション技術が欠かせないものとして位置づけられている。

これらの状況を踏まえて、A大学看護学部では入学して間もない時期から実際に看護の対象や看護場面に触れるための早期体験実習を行っており、本研究では早期体験実習の評価と学生の学びの内容を明らかにすることを目的としている。

## 2. 基礎看護学実習Ⅰの概要

### 1) 基礎看護学実習Ⅰの位置づけ（表1）

A大学看護学部のカリキュラムでは、基礎看護学実習は1年次の基礎看護学実習Ⅰの1単位45時間と2年次の基礎看護学実習Ⅱの2単位90時間で構成している。基礎看護学実習Ⅰは、1年次前期に見学実習として実施される。その目的は、学生が看護学概論を履修中という看護基礎教育の非常に早期の段階に、看護者の活動の実際や看護の場、看護の対象を観察することで、その後の学習を深め、動機づけることである。1年次前期に看護学概論と基礎看護学実習Ⅰを履修後、1年次後期から2年次後期にかけて基礎看護技術演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを履修し、基礎看護学実習Ⅱへつながっている。

### 2) 基礎看護学実習Ⅰの内容

表2に基礎看護学実習Ⅰの目的と目標を示した。学生は1日目に合同で実習オリエンテーションを受けた後、2～4日目に3グループに分かれて病院実習1日、介護老人保健施設又は介護老人福祉施設実習1日、学内課題学習1日をローテーションで体験する。最終日に学内にて合同で、全体の報告会を実施し、学びのまとめと共有を行う。記録は施設ごとに、概要と特徴、学んだことをまとめて提出する。

表 1 基礎看護学実習の位置づけ

学年	Ⅰ		Ⅱ	
セメスター	1	2	3	4
基礎看護系科目	看護学概論 基礎看護学実習Ⅰ	基礎看護技術演習Ⅰ	基礎看護技術演習Ⅱ	基礎看護技術演習Ⅲ 基礎看護学実習Ⅱ

表 2 基礎看護学実習Ⅰの実習目的、実習目標、実習内容

《実習目的》
施設に入所する人々の様子や生活の実態を把握するとともに、看護の役割を理解して、今後の学習に役立てる
《実習目標》
1. 施設における看護の役割が理解できる
1) 施設の概要や特徴について理解できる
2) 施設における看護活動の実際を知ることにより、看護者の役割を考える
2. 看護の対象はさまざまな健康レベルとライフステージにある人々であることを理解する
1) 看護師や患者とのコミュニケーションをとおして、さまざまな健康レベルにある看護の対象について理解する
2) 看護師や患者とのコミュニケーションをとおして、さまざまなライフステージにある看護の対象について理解する
3. 療養生活の様子や、患者を支える様々な医療従事者の役割と連携を理解する
1) 入院、入所している患者の生活の様子を把握し、今後の学習に役立てる
2) 医療チームの連携の実態と、その中で看護はどのような役割を担っているのかを知る

### 3. 方法

#### 1) 研究デザイン

学生の学習意欲、実習への自己評価を量的に分析する質問紙調査（以下調査A）と半構成的面接法により、個々の学生の学びを質的記述的に分析する面接調査（以下調査B）を実施した。

#### 2) 対象者とデータ収集方法

対象者は2008年に基礎看護学実習Ⅰを履修した本学看護学科の学生97名である。2009年1月と2月に口答にて、調査AとBの研究の趣旨と方法を説明し依頼した。

調査Aのデータの収集方法は、研究の目的、倫理的配慮、問い合わせ先を記載した説明文を添付した自記式質問紙と回収箱を、なるべく教員の目につかず、学生が自由に出入り出来る場所に設置し、4週間留め置いた後に回収した。

調査Bは研究の目的、倫理的配慮を記載した説明文を掲示し、面接への協力者を募集した。面接への協力が得られた6名の学生を対象に、2009年2月～3月に半構成的面接調査を実施した。場所は、学生のプライバシーが確保される個室を用い、1人につき30分の面接を1回実施、許可の得られた対象者については、面接内容を録音した。

#### 3) 調査内容

##### (1) 調査A

調査項目は学生の学習意欲、実習目的・目標への達成度、実習の内容に関する評価である。

##### ①学生の学習意欲

学習意欲は、看護学生学習意欲尺度（永嶋, 2002）を使用した。本尺度は「学習態度」、「演習・実習への取り組み」、「将来に対する展望」、「小集団学習への適性」の4因子、30項目で構成され、4段階のリッカートスケールで回答し、得点が高いほど意欲が高いことを示すが、信頼性と妥当性について確認されていない。今回の調査で妥当性については、 $N=33$ と十分なデータが得られず確認できなかった。また、項目分析において、項目4、7、24にフロア効果が（平均値－SD=0.90、0.89、0.95）項目19、20、26に天井効果がみられた（平均値+SD=4.30、4.20、4.05）。各因子の内的整合性を検討する Cronbach の  $\alpha$  係数と平均得点は表3に示した。第Ⅰ因子「学習態度」、第Ⅱ因子「演習・実習への取り組み」、第Ⅲ因子「将来に対する展望」の  $\alpha$  係数は0.65～0.77だったが、第Ⅳ因子「小集団学習への適性」の  $\alpha$  係数は0.54だった。各因子の平均得点は第Ⅱ因子「演習・実習への取り組み」が3.01と最も高く、第Ⅰ因子「学習態度」が2.41と最も低かった。各因子間の相関は第Ⅲ因子「将来の展望」と第Ⅳ因子「小集団学習への適性」の間に正の相関がみられた（ $r=0.42$ ,  $P<0.05$ ）。なお、本尺度は作成者の承諾を得て使用している。

表3 看護学生学習意欲尺度各因子の平均得点と  $\alpha$  係数

	構成項目数	平均値	SD	$\alpha$ 係数
第Ⅰ因子 学習態度	12	2.41	.44	.77
第Ⅱ因子 演習・実習への取り組み	6	3.01	.45	.65
第Ⅲ因子 将来に対する展望	6	2.98	.47	.67
第Ⅳ因子 小集団学習への適性	6	2.98	.43	.54

##### ②実習目的・目標への達成度

実習目的・目標に対する自己評価を Visual Analogue Scale (VAS) にて、100mmの線上で左端を最低の達成度、右端を最高の達成度として回答し、数値が高いほど達成度が高いことを示す。

##### ③実習の内容に関する評価

実習の時期、病院と高齢者ケア施設の実習期間の適切性と、基礎看護技術演習との関係について調査し、希望や意見についても自由記述で回答を得た。

## （2）調査 B

面接では「実習で一番記憶に残っていること」、「印象の強かった看護場面」、「基礎看護技術演習にて、実習が生かされているか」について質問し、そのほかは参加者の自由な語りに流れを任せた。

## 4）分析方法

### （1）調査 A

尺度の信頼性については Cronbach の  $\alpha$  係数を使用し、尺度の下位因子相関、学習意欲と実習目的・目標への達成度は、Spearman の順位相関係数を使用した。表中の各変数は欠損値を除外して分析した。解析には SPSS16.0 J for Windows を使用し、5%未満を有意水準とした。

### （2）調査 B

面接内容を逐語録として起こし分析対象とした。まず、逐語録より「実習における体験や学び」、「実習がその後どのように生かされているか」に関する記述を事例ごとに抽出し、複数の研究者で個々のデータから抽出された意味内容を類似したテーマに整理した。

## 4．倫理的配慮

調査は研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施した。参加者には、研究目的、方法、プライバシーの保持、結果の公表の仕方、参加の任意性、協力を拒否しても不利益が生じないこと等を口頭と文書にて説明した。調査 A に関しては、回答をもって同意が得られたとし、調査 B では文書にて同意を得た。

## 5．結果

### 調査 A（質問紙調査）

調査対象者97名中、33名（回収率34.0%）から回答を得た。記入不備を確認し、33名を分析対象とした。

### 1）実習の内容に関する評価（図1、図2）

病院と高齢者ケア施設での実習期間（1日）について、70.6%の学生が適切だと回答した。1年次前期の実習時期については、不適切と回答した学生が41.2%おり、そのうち57.1%の学生が1年次後期の実施を希望していた。1年次後期を希望する理由としては「知識不足で何を見てよいか分からなかった」、「知識不足による不安、何も出来ない」、「看護技術を少しでも学んでから行きたかった」という意見が出された。適切と答えた約半数の学生の意見には、「専門科目の少ない余裕のある時期にできて良かった」、「技術演習への参考になった、意欲が増した」があった。1年次後期の看護技術演習には76.5%の学生が役立っていると回答し、具体的には「技術の根拠を理解するときに役立つ」、「技術と実際の場面を結びつけてイメージがわく」、「アセスメントをする際の助けとなる」、「看護師の立場以外でも考えられる」という意見が出た。役立っていないと回答した学生の理由は「技術を学んでからのほうが理解できた」だった。

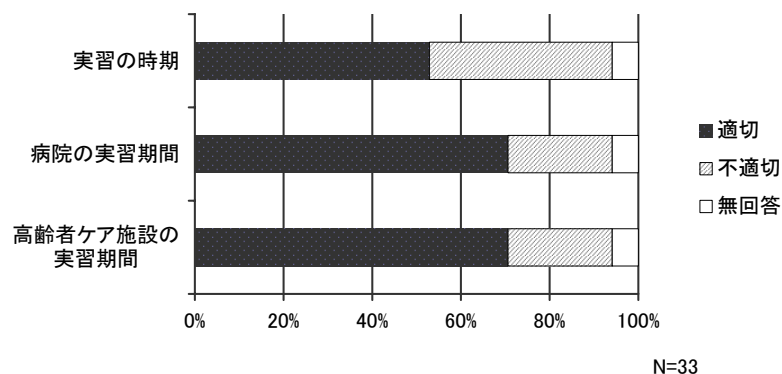


図 1 基礎看護学実習 I への学生の評価

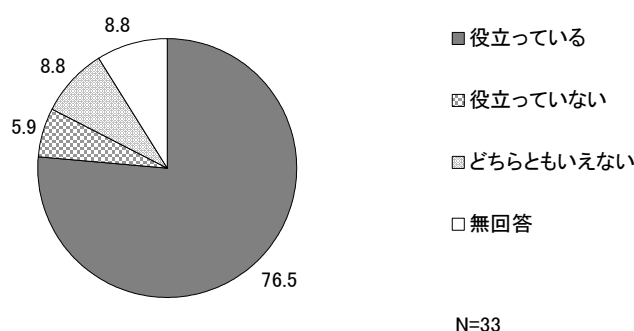


図2 基礎看護技術演習との関係 (%)

## 2) 対象学生の学習意欲

看護学生学習意欲尺度の全体の平均得点と標準偏差は、 $2.76 \pm 0.29$ だった。また、項目ごとの平均得点を昇順に表4にまとめた。最も平均得点が高かったのは項目20で3.66であり、最も平均得点が低かったのは、項目7で1.61だっ

表4 看護学生学習意欲尺度項目平均得点 (昇順)

項目内容	N=33	
	平均値	標準偏差
20 看護を学ぶことは将来自分の夢を実現するために意味のあることだと思う	3.66	.545
* 19 看護を選択したことを後悔している	3.55	.754
26 グループワークの学習ではメンバーの意見を聞けるので個人学習より学びが深まる	3.39	.659
25 グループで学習することは看護を学ぶうえで重要なことと思う	3.36	.549
3 課題のレポートを書くときは、資料を収集してから取り組む	3.24	.751
30 グループ学習はみんなで意見交換をできるので楽しい	3.15	.712
13 病院の実習や学校内の技術実習を今から楽しみにしている (楽しかった)	3.12	.696
16 実習は様々な患者に出会えるので楽しい (楽しいと思う)	3.09	.678
21 入学してから看護への憧れが強くなった	3.09	.843
18 実習では色々な看護職から看護を学ぶことができるので充実感がある (あった)	3.06	.747
23 将来に対する明確な目標を持って看護を学んでいる	3.03	.782
* 11 看護に関する講演会や学会等には関心がない	3.03	.810
* 15 学校内の技術実習や病院の実習をするのは今から苦痛である (だった)	2.97	.810
* 29 グループ学習の中でメンバーから自分の意見を否定されると学習する気がなくなる	2.94	.747
* 14 看護の技術はテクニックを習得するだけでなく、科学的根拠も学ぶので苦痛だ (だった)	2.94	.716
17 実習では学内で学習したことを実際にケア出来るので楽しみである (楽しかった)	2.84	.767
* 12 看護の勉強は難しすぎて理解できない	2.82	.683
1 学校の課題がなくとも、図書館を利用する	2.67	.990
27 グループワークの学習では自分から積極的に発言する方だ	2.64	.994
9 学校に掲示してある看護に関する勉強会や、講演会の参加申し込みに目を通す	2.64	.742
* 22 看護職は自分には向いていないと思う	2.63	.793
8 疑問があったら教師に質問する方だ	2.42	.969
5 書店等へ入って看護に関する本を買っている	2.39	.998
* 28 グループの中でまじめに取り組まないメンバーがいると、自分もやる気をなくす	2.39	.899
6 将来の目標達成のために今から学習していることがある	2.36	.929
2 将来の目標を達成するために、日頃から情報収集を行っている	2.30	.847
10 教員から紹介された文献や本には必ず目を通す	1.88	.600
* 24 看護職の国家試験に合格することが一番重要である	1.81	.859
4 看護や保健医療福祉に関する記事を切り抜き整理している	1.64	.742
7 レポート作成のために図書館以外の他の施設に行っている	1.61	.704

注) \* は逆転項目

た。上位10項目には、看護を学ぶ意義や将来への展望、実習や演習、グループ学習への肯定的な態度を示す項目が入った。一方で下位10項目には、不明点を教員へ質問する、講義で紹介された文献や本に目を通す、日頃から幅広く看護や医療に関わる情報収集する、書店で看護の本を購入、図書館以外からも情報収集をするなど、より積極的な学習態度を示す項目や、国家試験に関する項目と実際の仕事へのギャップに関する項目が含まれた。学習意欲の各因子と実習目的・目標の達成度間に有意な相関はみられなかった。

### 3) 実習目的、目標への自己評価

実習目的、目標への自己評価について図3にまとめた。平均値、標準偏差、中央値、範囲は、実習目的で57.97±15.72、57.97、14～77、目標1-1)で52.19±16.27、54.00、25～90、目標1-2)で58.84±13.97、57.00、25～76、目標2)で56.53±13.02、55.00、31～83、目標3)で58.58±17.19、56.00、25～98だった。

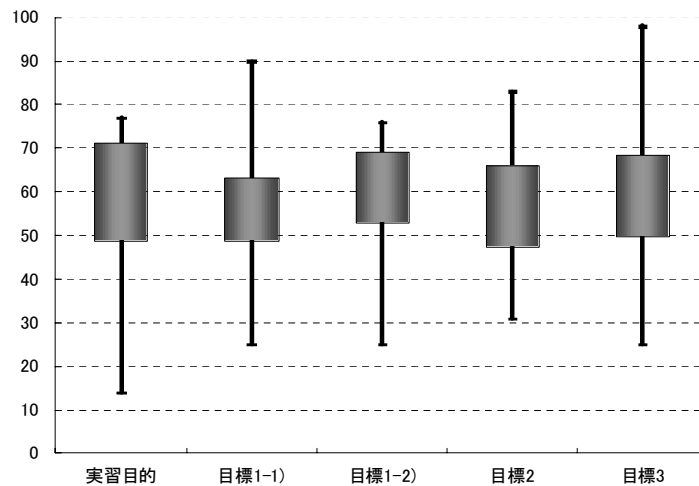


図3 実習目的、目標への自己評価

### 調査B（面接調査）

実習における学び、基礎看護技術演習との関連についてカテゴリ化を行った。結果は、早期体験実習からの学びとして【患者や家族との関わりからの学び】、【医療や福祉の場を知ること】、【実習と授業とのつながり】、【看護ケアの具体化】、【意欲の向上】の5カテゴリが、早期体験実習への戸惑いと要望として【初めての实習での戸惑い】、【早期体験実習への要望】の2カテゴリが抽出された（表5、6）。以下に各カテゴリの特徴的な部分を詳述する。カテゴリは【 】、サブカテゴリは〈 〉、生データは〔 〕で示した。

#### 1) 早期体験実習からの学び（表5）

実習での学びの内容に関しては、【患者や家族との関わりからの学び】、【医療や福祉の場を知ること】、【実習と授業とのつながり】、【看護ケアの具体化】、【意欲の向上】の5カテゴリが得られた。

【患者や家族との関わりからの学び】は、認知症患者と初めて接して受けた印象や驚きを示す〈認知症患者とのコミュニケーション〉、患者や高齢の入所者と関わる際に感じた困難を示す〈患者や入所者とのコミュニケーションの難しさ〉、また患者に付き添う家族の様子から感じた〈家族の大変さを感じる〉のサブカテゴリからなる。

【医療や福祉の場を知ること】では、施設で入所者が受けている日常生活への援助の様子を見学した〈施設でのケアを見学〉、施設の外見から得られた印象である〈施設的环境を知る〉というサブカテゴリからなる。

【実習と授業とのつながり】は、実習と授業とが結びつき、より理解や知識が深まる経験である〈実習経験により授業内容への理解や考えが深まる〉、演習中のイメージが豊かになる経験が語られた〈実習経験により、看護へのイメージがわく〉というサブカテゴリが示された一方で、演習では実習のことを思い出さない、活かせなかったという〈実習での体験と演習との切り離し〉サブカテゴリがあげられた。



表 5 早期体験実習からの学び

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
患者や家族との関わりからの学び	認知症患者とのコミュニケーション	認知症の方と初めて接し、すごくびっくり
		認知症でも実際には会話も出来る方もすごく多く、すごく印象的
	患者や入所者とのコミュニケーションの難しさ	話しかけても反応のない人とのコミュニケーションが分からず、自然と避けていた
		(高齢者では)コミュニケーションが難しいと感じた
		入所者さんから同じ話を2,3回聞いた
	家族の大変さを感じる	病院では患者さんとあまり話さなかった
		しんどいのは患者さんだけではなくて、家族の方も気持ち的にはすごく辛い
医療や福祉の場を知ること	施設でのケアを見学	患者さんの前で辛いところをみせないようにという家族の気遣いがすごいと思った
		入所者の食事内容の説明を受けた
		食事介助の見学をした
		トイレの介助の見学をした
実習と授業とのつながり	施設的环境を知る	入浴介助の見学をした
		施設は落ち着いている
	実習経験により授業内容への理解や考えが深まる	施設は家のような感覚
		病院が綺麗引きでびっくりしました
	実習経験により、看護へのイメージがわく	実習中はただ手を消毒しているんだと思ったが、演習後に感染を防ぐために手指の消毒が大事だからだと分かった
		演習を経て実習中見学した内容の大切さを理解できる
		実習で一度見学したことは演習でなるほどと思える(体位変換)
		見学時には自己解釈となるが、演習を経て内容を理解した
	実習での体験と演習との切り離し	見学の時は気にならないことも、後から気になることがある
		演習後、患者個別に応じた工夫が必要だと感じたので、実習で見ておきたかった
看護ケアの具体化	患者とのコミュニケーションにおける工夫を学ぶ	実習に行つて、演習でロールプレイングするときのイメージが付きやすくなったかもしれない
		(学校で学ぶ技術の通り)やっぱりちゃんとやっているんやな
	一人一人の患者に個別に対応する大切さを知る	実際に看護しているのを見て、これなんやなと思いました
		技術は技術で、そこに実習のことを思い出すということがなかった
	患者の意志を大切にする姿勢を学ぶ	授業中にはその時にやっていることでいっぱいになってしまい、考える余裕がない
		実習がのちの授業や技術に活かすということとは出来ていなかったように思います
	看護ケアを継続する大切さを学ぶ	声のかけ方もまず先に挨拶することも大事
		清拭などの場面で(患者との)会話を設けている
	看護師がチームで働いている様子を学ぶ	会話できない患者でも看護師には伝わっている
		老健では顔なじみの方とのコミュニケーションの工夫の学びがあった
意欲の向上	勉強する必要性を認識する	患者のペースに合わせて慌てさせないように配慮していた
		一人一人に合わせて対応の仕方が違う
	学ぶ楽しさを知る	看護師の入所者に対する気遣いへの感心
		一つ一つ丁寧、気づきがすごいと思いました
	自主性の必要性を感じる	絶対にしないといけないことではなかったら、患者さんの意思を優先していて、満足できるようにしていた
		ある程度患者さんの気持ちを看護師がくみ取っていたのが印象的
	専門職としての責任感を感じる	患者の納得を得てからケアを実施していた

【看護ケアの具体化】では看護師と患者のやりとりを見学することで、挨拶の大切さや、ケア中の声かけ、患者の意思を読みとるなどの〈患者とのコミュニケーションの工夫を学ぶ〉というサブカテゴリがあった。看護師が患者の要望に応える様子から〈一人一人の患者に個別に対応する大切さを知る〉〈患者の意志を大切にする姿勢を学ぶ〉〈看護ケアを継続する大切さを学ぶ〉というサブカテゴリがあり、患者への対応以外からは〈看護師がチームで働いている様子を学ぶ〉というサブカテゴリがあった。

【意欲の向上】では学校で学んでいることの重要性や知識のなさを認識し〈勉強する必要性を認識する〉ことがあげられ、実習という形態での学習経験から、〈学ぶ楽しさを知る〉〈自主性の必要性を感じる〉という学びがあげられた。また、便の観察をする看護師の様子から〈専門職としての責任感を感じる〉という学びがあげられた。

## 2）早期体験実習への戸惑いと要望（表6）

実習における学びの他に、早期体験実習への戸惑いと要望に関して、【初めての实習での戸惑い】、【早期体験実習への要望】の2カテゴリがあがった。

【初めての实習での戸惑い】では、「何をみたらいいかというのが分からない」などの〈実習の目的や目標が不明確〉な様子がみられた。また、「施設では放っておかれた感じ」「詰所での居心地の悪さ」などの〈実習におけるつらさ〉や、「教えてもらえない」「やることがなかった」など〈受け身の実習態度〉からくる戸惑いや、実習前に持っていた介護職員や看護師へのイメージとの違いや、現場の忙しさへの驚きを表わす〈自分のイメージとの違い〉があがった。

【早期体験実習への要望】では、〈実習での心残り〉として、施設での看護に触れる機会が少なかったことや、病院で患者と接する機会が少なかったことがあがった。また、実習で1人の看護師につき見学することで、チームでの活動をみたい、他科の様子を見たい、看護師業務の全体がみたいという〈関心の広がり〉があがった。

表 6 早期体験実習への戸惑いと要望

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
初めての 実習での 戸惑い	実習の目的や目標が不明確	実習が細かくみて教えてもらえるものか、見学するものか自分の中ではっきり分からない
		何をみたらいいかというのが分からなかった
		実習で何をみておきたかったというのが、分からない
		着眼点（目標）が明確になっていればよかった
		実習ではなく、見学だと思った
		実習の一番の目的は雰囲気をつかんで、自分の中で課題をみつけることなんですよ
	受け身の実習態度	知識がないのに実習に行ったらどうなるんやろ
		きちんと見てもらえない、教えてもらえなかったと感じた
		職員にただついていき、流れや今何をしているか分からなかった
		入所者さんとの話し相手になるよう言われ、介護士さんから話がきけなかった
		やることがなく、立っていることが多かった。もっと積極的に入りたかった
		施設のスタッフも忙しく、そんなに見てもらえない
	実習におけるつらさ	もうちょっと時間をかけて課題を出されてもいいんじゃないかな
		施設では間に誰かいてくれた方がやりやすかった
		詰め所での居心地の悪さ
		老健施設では、放っておかれた感じ
早期体験実習への要望	自分のイメージとの違い	老健施設では、放っておかれた感じがあった
		施設では学生だけ残されて、野放しだった
		介護施設で働く人が、自分のイメージと違った
		職員が入所者を自分の家族のように扱い、歯にものをきせないような言い方をしているのが気になった
	実習での心残り	介護施設の職員は入所者にもっと気を遣った言い方をすると思っていた
		看護師は常に立ち仕事で、手の作業も加わり大変だ
		看護師業務の忙しさは想像以上
		演習で身だしなみを注意されるが、自分のついた看護師がポニーテールで服装などがラフなのかと思った
	関心の広がり	老健施設では物足りなかった
		施設で働く看護師から色々話を聞きたかった
		施設での看護もみてみたかった
		（老健の看護師業務は）授業しかみれていない
		（病院では）患者ともっとコミュニケーションをとりたかった
		1人の看護師だけでなく、チームでの活動もみたかった。
		もっと全体的に見たかった
		流れとしてどうやっているのかというのが、あまり見れなかった
		看護師同士のカンファレンスは単語が分からず、難しかった
		自分がみた以外の科の病棟も見たかった

## 6. 考察

### 1）学生の学習意欲について

看護学生学習意欲尺度項目の平均得点からは、看護を選択したことに満足し、実習や演習に前向きに取り組む姿勢が読み取れる。しかし、「夢の実現」や「憧れ」という項目が高く、将来の目標達成のための学習や情報収集に関する項目が低かったことから、漠然とした関心や意欲を持っているが、現実的な行動には結び付いていない可能性が推測される。寺島（1998）は、学習意欲は学年進行に伴い変化し、入学時の動機とも関連すると述べており、



本調査がまだ具体的な実習や演習が始まっていない1年次を対象としたことから、今後は学年による相違や志望動機もとの関連も含めて検討する必要がある。

学習態度については、小集団学習に前向きに取り組む項目が高い一方で、小集団学習時の積極的な意見交換やうまくグループが機能しない場合の取り組みに関する項目は低かった。また、課題のレポートへ取り組むという項目は高かったが、自ら看護を取り巻く幅広い分野も含めた情報収集を積極的に行う項目は低く、学習態度が受け身となっている傾向がみられた。溝上（1996）は、大学生は学問や知性に対する関心が高い学生以外は、いずれも学習が内発的になされておらず、卒業の単位や出席点などの外発的な動機づけにより授業を受けている学生で構成されていることを指摘しており、学習自体が目的となっていない学生に対して学習への価値づけや知的好奇心を刺激するなどの外的な働きかけが必要であるとしている。今後、学習態度については、その動機づけを含めて吟味し、演習・実習方法を工夫していく必要性が示唆された。

## 2) 早期体験実習における学び

実習目的や目標に関しては、実習目的、目標1-1)、1-2)、3では、75%の学生が49～50以上の評価をしているが、下位25%の学生では得点のばらつきが大きく、実習目的の達成度では20以下と非常に低い学生もいる。学生の臨地実習での経験を学習意欲や自己学習能力の向上につなげるものとして、自己効力感が注目されており（眞鍋ら、2007）、実習への満足度には学生が体験した実習内容や個別指導、指導看護師の効果的な関わり（岩脇、2008）が指摘されていることから、今後は自己効力感や観察できた内容、教員の指導や担当看護師との関わりも含めた検討が必要である。

学生の学びの具体的な内容として、【患者や家族との関わりからの学び】では、患者や高齢や認知症の入所者と関わることで、コミュニケーションの特徴や難しさを体験していた。学生の中には、患者だけではなく看護の対象として家族の苦痛を感じるという視野の広がりもみられた。【医療や福祉の場を知ること】では、施設で日常生活への介助の見学や、施設の雰囲気や概要に関するものがあがり、実習目標に即した内容となっている。【実習と授業とのつながり】では、実習と授業とが結びつき、より理解や知識が深まる経験や、実際の看護のイメージが豊かになる経験が語られた。一方で、演習と実習が切り離されている場合もあったため、演習の導入には検討が必要である。【看護ケアの具体化】では看護師と患者のやりとりを見学することで、コミュニケーションの工夫や患者の個性への対応、看護師としての姿勢など『看護とは何か』ということをより具体的に語ることができるようになっていた。【意欲の向上】では実習を経験することで、勉強する必要性や自主性の大切さを認識し、専門職としての責任感を感じていた。また、実際に見た現象と知識が結びつくことで、学ぶ楽しさを感じていた。これらの内容は、看護の実践を見学することで、看護の役割について学び今後の動機づけを得ること、コミュニケーションのなかで主に老年期にある対象について学ぶことにあたり、実習目標を達成できていると考える。一方で、実習目標の療養生活の様子を把握する、医療チームの連携を知る部分は今回の面接では出てきておらず、実習プログラムや目標設定の検討が必要である。

## 3) 早期体験実習における今後の課題

実習の内容に関して、実習期間は70%の学生が、実習時期については59%の学生が適切としており、77%の学生が演習に役立っていると回答したことから、内容について学生の評価は低くはないといえる。しかし、調査Bの面接結果からは【初めての实習での戸惑い】で、実習の目的や目標が不明確であり、実習で何をして良いかが分からない、知識がないことへの不安や苦痛がみられた。また、受け身の学習態度からくる戸惑いや、自分のイメージとの違いが消化されていない様子もみられ、オリエンテーションや事前学習の工夫により、実習の目的や目標を明確にできるような援助や、実習場での居場所のなさや、保健医療福祉の場への否定的な印象に対してフォローしていく必要性が示唆された。

また【早期体験実習への要望】では、施設での看護に触れる機会が少なかったことや、病院で患者と接する機会が少なかったことがあげられており、施設におけるプログラムの工夫や病院における実習指導者と調整していく必要がある。さらに、チームでの活動をみたい、他科の様子を見たい、看護師業務の全体がみたいという〈関心の広

がり〉を十分に生かせるよう、今後の演習や講義への動機づけとなるような働きかけが求められていると考える。

## 7. 本研究の限界と課題

調査 A に関する分析対象者が33名と非常に少なく、今後はより多くの学生からデータを得る必要がある。また、学生の学習意欲が実習の評価や到達度に大きく関わってくることが推測されたが、今回は有意な関連を見出すことができなかった。学習意欲は外発的動機づけと内発的動機づけが複雑に作用し、どの程度の勉強をして集まってきたのかという学生要因、大学の社会的な立場、理系・文系などの学部要因により質が非常に多岐にわたるとされており（溝上, 1996）、作成者である永嶋（2002）も、内的学習項目の不足を課題としてあげていることから、学習意欲の測定にはさらなる検討が必要である。調査 B では、対象者を公募により集めており、実習や演習に関心の高い学生が多く集まるなど、何らかの偏りが生じている可能性があるため、幅広い学生の意見を取り入れられるような、対象者選定の方法を検討していく必要がある。

## 謝 辞

本研究は、平成20年度千里金蘭大学特別研究費（A）の助成を受けて行われた。

## 文 献

- 赤松公子, 山内栄子, 後藤淳, 他3名（2008）：看護実践能力育成に関する基礎教育の検討 - 卒業生の自己評価と職場における客観的評価の比較 -, 大学教育実践ジャーナル, 6, 19-25
- 岩脇陽子, 滝下幸栄, 今西美津恵, 他5名（2008）：早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因, 京都府立医科大学看護学科紀要, 17, 31-39
- 厚生労働省医政局看護課（2007）：看護基礎教育の充実に係る検討会報告書, 平成19年4月20日
- 厚生労働省医政局看護課（2003）：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 平成15年3月17日
- 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 他4名（2007）：看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性お検討, 日本看護研究学会誌, 30, 2, 43-53
- 溝上慎一（1996）：大学生の学習意欲, 京都大学高等教育研究, 2: 184-197
- 長家智子（2003）：看護学生のコミュニケーションに関する研究 - 生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて -, 九州大学医学部保健学科紀要, 1, 71-82
- 永嶋由美子（2002）：看護学生の学習意欲の比較検討-専門学校・短期大学・大学の看護学生について-, 山口県立大学看護学部紀要, 6, 37-43
- 大橋久美子, 菱沼典子, 佐居由美, 他3名（2008）：看護大学入学生の生活体験, 聖路加看護学会誌, 12, 2, 25-32
- 寺島喜代子（1998）：看護学生の学習態度と自尊感情の縦断的研究 - ある公立看護短期大学の場合 -, 日本看護研究学会雑誌, 21, 4, 7-19
- 寺山範子, 蛭子真澄, 大野かおり, 他7名（2008）：臨地実習の技術経験実態調査からみた技術教育への一考察, 神戸市看護大学紀要, 12, 1-9